（公財）中央果実協会
No.280

台湾の落葉果実事情（リンゴ）

米国農務省GAINレポート　2023年11月7日

これは米国農務省海外農業局台北事務所（台湾）が作成した「落葉果実年次報告書」の一部を翻訳したものであり、米国政府の公式見解及びデータとは異なる場合があります。

概要

台湾の2022/23年度のリンゴ輸入量は13万1,252トンであり、2023/24年度は13万トンと予測される。米国は依然として量的に最大のリンゴ輸入先であるが、市場シェアは日本、ニュージーランド、チリといずれも僅差である。ニュージーランドの無関税アクセスと消費者の間での日本の高い評価は、米国とチリの市場シェアを徐々に侵食している。台湾自身のリンゴ生産量は、総消費量の1%に当たる1,406トンと小規模である。

＜リンゴ＞

生産

2022/23年度の台湾のリンゴ生産量は合計1,406トンで、前回の予測に沿ったものであった。

台湾は亜熱帯気候のため、リンゴは高山地帯でしか栽培できず、主な産地は台中市の和平（ヘーピン）区と南投（ナントウ）県の仁愛（レンアイ）郷である。仁愛郷の栽培面積は次第に減少しているが、和平区の栽培面積は比較的安定している。

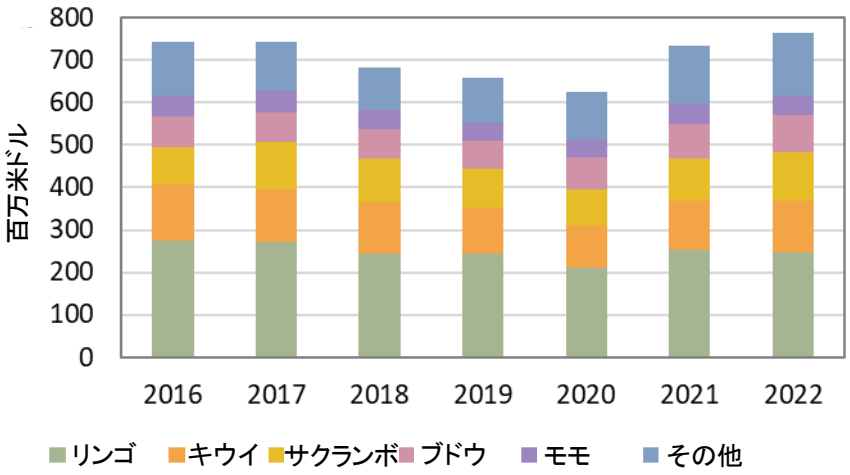
2023/24年度の総栽培面積は引き続き緩やかな減少傾向で、176ヘクタールと予測される。気候条件の変化により平均気温がますます高くなることを考慮すると、リンゴ園は他の短期的な作物に転用され、長期的に見てリンゴの栽培面積は縮小を続けると予想される。

2023/24年度の生産量は、2023年春の干ばつと夏の台風により、1,350トンに減少すると予測される。果実の品質も低下し、サイズも小さくなるものと見られる。

消費と貿易

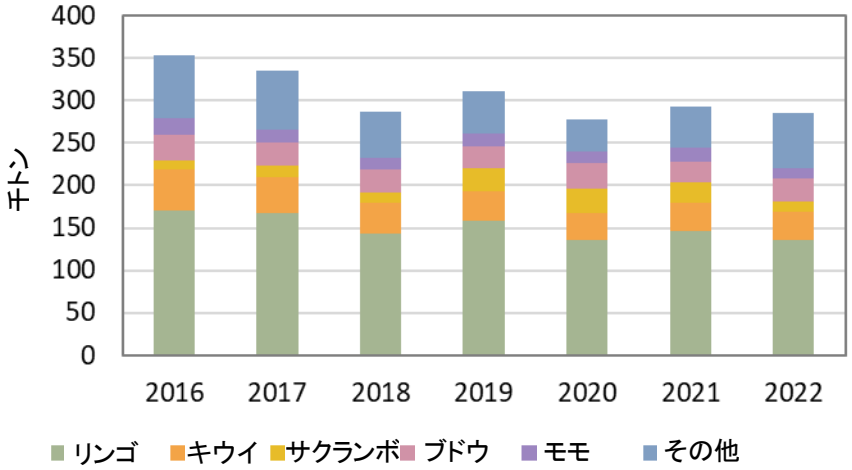
台湾は主に輸入リンゴに頼っており、現地生産は消費量のわずか1%である。リンゴは台湾で最も多く輸入されている果実で、輸入市場で全果実に占めるシェアは金額で約37%、数量で約48%である（図1、図2）。2016年から現在までに、台湾の果実輸入は金額では比較的安定しているが数量では10%減少し、リンゴの輸入量は20%減少した。［注：果実の総輸入量は暦年ベースであり、リンゴの貿易量は販売年度（7月～6月）ベースである。］

図1　台湾の果実輸入額　2016～2022



出典: Trade Data Monitor (TDM)

図2　台湾の果実輸入量　2016～2022

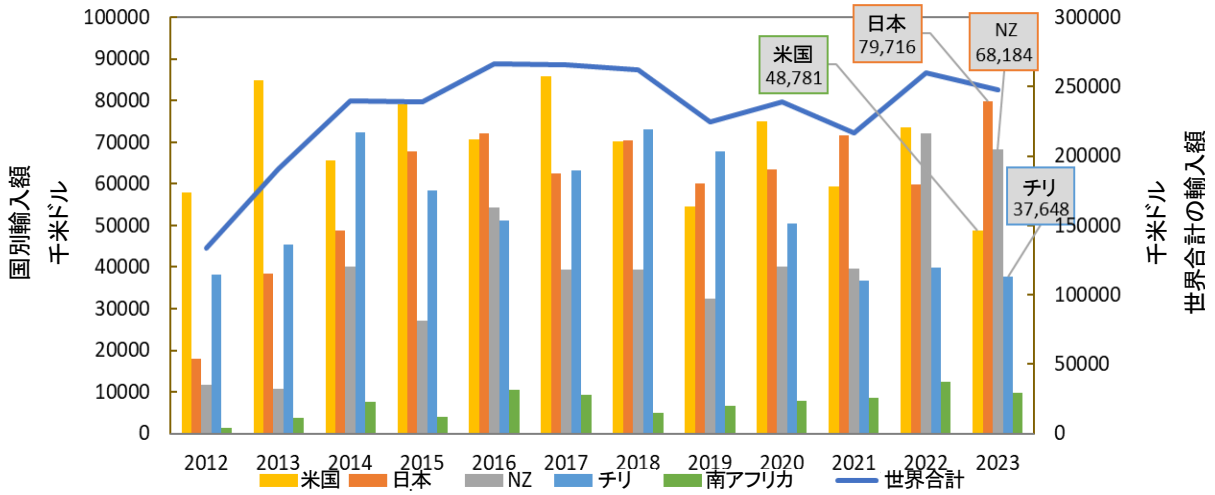


出典：TDM

2022/23年度のリンゴ輸入量は13万1,252トンで、前回の予測より約12%多かった。2023/24年度のリンゴ輸入量は13万トンの横ばいと予測される。2022/23年度の米国からの輸入量は3万1,966トンで、市場シェアは約24%であった。米国、日本、ニュージーランド、チリからの輸入量は非常に僅差で、それぞれの市場シェアは22%～24%であった(図4)。

過去10年間で、台湾の輸入リンゴ市場は、従来の2大供給国から徐々に離れ始めている。2012/13年度の数量ベースの市場シェアは、米国が42%、チリが37%であった。それ以降、ニュージーランドと日本が供給量と金額で大きく成長した。2022/2023年度の金額ベースの市場シェアでは、米国は19%、チリは15%に低下した(図3)。現在、日本は2022/2023年度の金額ベースで32%の市場シェアを獲得し、ニュージーランドが27%で続いている。ちなみに、2012年の市場シェアは日本が13%、ニュージーランドが10%未満であった。

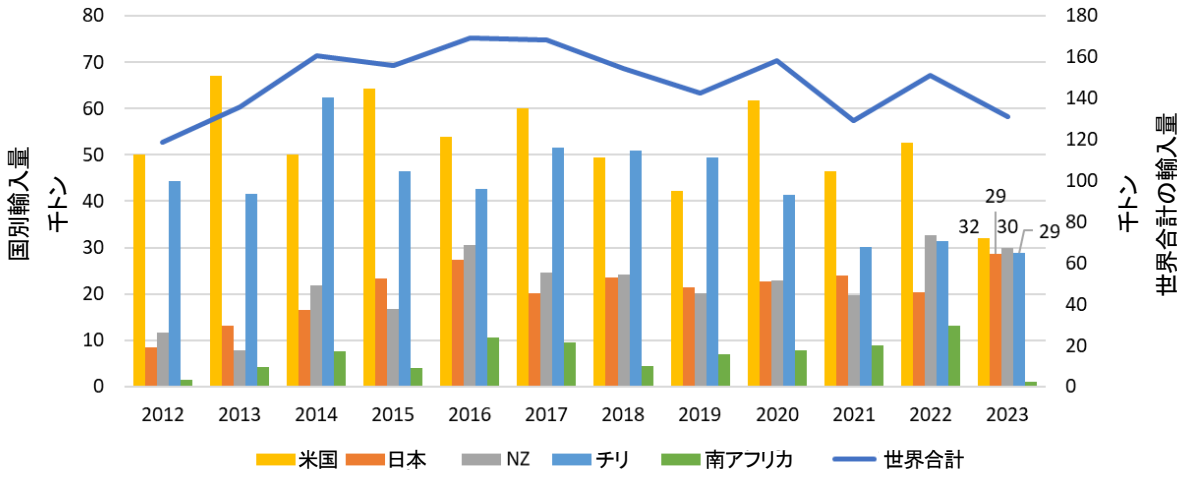
図3　台湾のリンゴ輸入額　2012～2023



出典：TDM

米ドル高、円安、米国の生産量の減少、台湾との経済協力（ANZTEC）協定に基づくニュージーランドの関税優位性など、複数の要因がこの変化に寄与している。チリ産のリンゴも、国境検査で残留農薬の問題が続いており、課題に直面している。

図4　台湾のリンゴ輸入量　2012～2023



出典：TDM

2023/24年度の台湾のリンゴ総消費量は、米国とニュージーランドからの供給が減少するため、微減の13万1,350トンと予測される。米国産リンゴの価格は、気候変動の問題と旺盛な内需により、比較的高い水準にとどまると予想される。台湾は、ニュージーランド産リンゴの最大級の輸出先である。ニュージーランド産リンゴの価格も上昇すると予想されるが、供給量はまだ十分に多い。台湾の業界筋の報告によると、彼らはニュージーランド産のリンゴは米国産のリンゴに比べて価格競争力が高いと予想している。

その他のマーケティング要因

10月はアメリカ産リンゴの旬であるが、台湾のチェーンスーパーの棚にはニュージーランド産のリンゴが見られる。貿易データによると、ニュージーランド産リンゴの供給シーズンは長期化する傾向にあるようで、このことは同国の総合的な競争力を高めると考えられる。

近年、日本産のリンゴは主要な小売店で目立つように陳列され、顧客の注目をよく集めている。日本産リンゴの価格は米国産リンゴと比べて高いものの、台湾の消費者の間で日本産果実の高品質のイメージが強いことが、日本産リンゴの貿易量の増加に寄与している。

図5　台湾の小売市場におけるリンゴの販売状況（2023年10月）

出典：執筆者撮影

台湾のリンゴ（生鮮）の生産需給統計

リンゴ（生鮮）	2021/2022		2022/2023		2023/2024	
販売年度の始まり	2021 年 7 月		2022 年 7 月		2023 年 7 月	
台湾	農務省公式	今回推計値	農務省公式	今回推計値	農務省公式	今回推計値
栽培面積（ヘクタール）	186	186	182	181	0	176
収穫面積（ヘクタール）	186	186	182	181	0	176
結果樹本数（1000 本）	67	67	66	64	0	62
未結果樹本数（1000 本）	0	0	0	0	0	0
果樹本数合計（1000 本）	67	67	66	64	0	62
商業的生産量（トン）	1,458	1,458	1,400	1,406	0	1,350
非商業的生産量（トン）	0	0	0	0	0	0
生産量合計（トン）	1,458	1,458	1,400	1,406	0	1,350
輸入量（トン）	151,300	151,260	125,000	131,252	0	130,000
総供給量（トン）	152,758	152,718	126,400	132,658	0	131,350
国内消費量（トン）	152,758	152,718	126,400	132,658	0	131,350
輸出量（トン）	0	0	0	0	0	0
市場からの隔離（トン）	0	0	0	0	0	0
総仕向け量（トン）	152,758	152,718	126,400	132,658	0	131,350

政策

輸入関税：（HS080810/生鮮リンゴ）

台湾向けの主要リンゴ輸出国の大部分には20％の関税が課されるが、ニュージーランドは2013年から台湾ニュージーランド経済協力（ANZTEC）協定の下で免税措置を受けている。

表1　台湾の輸出国別リンゴ関税

輸出国	関税率
米国、チリ、日本、南アフリカ	20%
ニュージーランド	0%

輸入植物検疫規則：

生鮮食品はTFDA（台湾衛生福利部食品薬物管理署）及びAPHIA（農業部動植物防疫検疫所）によって規制されている。米国産の生鮮リンゴは、APHIAの「米国からの生鮮リンゴの輸入に関する検疫要件」（2019年10月29日版）によって規制され、APHIS（米国農務省動植物検疫局）発行の植物検疫証明書（様式PPQ577）を添付する必要がある。

植物検疫証明書は、任命されたAPHIS職員またはAPHISが認可した州及び郡の当局によって発行される。米国産の生鮮果実の出荷に関するその他の植物検疫証明書は、台湾の植物衛生規制当局によって受け入れられなくなった。第5.6条によると、検疫要件の病害虫リストが変更された場合、更新されたリストはウェブサイトで確認できる。

TFDAは、国境検査を担当する所轄官庁である。台湾では、「食品中の残留農薬基準」によるポジティブリスト制を採用している。最新版（2023年6月15日更新）はこちら（または統合サイト）を参照されたい。重金属の基準は、TFDAの「食品中の汚染物質及び毒素に関する衛生基準」に記載されている。